

# 第15回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第15回  
文芸思潮  
エッセイ賞

二〇二〇年度第15回「文芸思潮」エッセイ賞は、二七七篇という多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。今回も十代から九十代まで幅広い世代から寄せられると同時に、地域的にもヨーロッパ、東南アジアなどから広く御応募いただきました。それぞれの貴重な体験だけでなく、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評や問いかけも多く寄せられ、現代に生きる人々の姿が反映された豊かな内容でした。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、その中からさらに最終選考作品が選ばれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって七月三十一日最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

### 最優秀賞

「そば打ちにハマる高校生」

石田真一（大阪府堺市）

### 「ビオラ」

メーシリング順子

（フランス・リヨン県）

### 優秀賞

「珈琲店の奇跡」

東出菜代（東京都港区）

「ビーバーの目」

藪口莉那（静岡県静岡市）

「息子の学生服」

家森澄子（岡山県倉敷市）

「じつちゃんとの追憶」

高槻勇治（京都府相楽郡）

「べこ石の浜辺で」

金田一淳（青森県三戸郡）

「チキンライス」

晋多可幸（京都府京都市）

「私を待つ人」

松田正弘（京都府京都市）

「小さな発見 野菜の祖先と出会う旅」

本間 浩（東京都府中市）

### 社会批評優秀賞

「貯金これだけでよく平気だね」

柴田節子（北海道帯広市）

「移動の自由と喜びを求めて」

藤野高明（大阪府大阪市）

### 奨励賞

「さよならモチの木」

藤崎良子（福岡県遠賀郡）

「『浅間山噴火大和讃』が繋ぐ鎌原の命」

村松佐保（群馬県吾妻郡）

「弔い上げ」

さとうゆきの（福岡県遠賀郡）

「破り捨てた招待状」

菱川町子（愛知県稲沢市）

「恩師への思い」

佐高 源（山梨県中巨摩郡）

「絵イコール人生」

宮尾美明（愛知県愛西市）

「終戦のころ」

神宮清志（神奈川県横浜市）

「夢を紡ぐ手」

森千恵子（福岡県福岡市）

「ジャイ子」

田中美晴（大阪府豊中市）

「立ち食いそばラブ」

杉山高志（鳥根県出雲市）

「雪の日のマジック」

藤野なつみ（兵庫県姫路市）

「あの子とその母、そして父」

中武 寛（宮崎県西都市）

「声」

牧野香織（兵庫県尼崎市）

「裏方三十年の轍」

森崎律子（大阪府大阪市）

「脳腫瘍闘病記」

出雲文子（東京都墨田区）

「墓参」

西嶋雅博（福島県いわき市）

「私の戦中戦後 横須賀にて」

伊藤秋子（東京都町田市）

「心の橋」

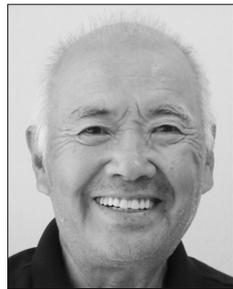
松島さおり（神奈川県茅ヶ崎市）

（次ページに続く）

奨励賞

- 「ドレとミの音がでない」河原梨香子（北海道北広島市）  
 「僕の十八年間」長谷川皓大（神奈川県横須賀市）  
 「山田耕筈とマニキュア」藤田陽子（神奈川県厚木市）  
 「大阿蘇の野焼き」上原翠子（熊本県熊本市）  
**社会批評奨励賞**  
 「成年後見制度は法の下の虐待である」佐生綾子（東京都世田谷区）

選評



みずき りょう

作家・劇作家・演出家  
 1942 北朝鮮生まれ  
 99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞  
 2006 小説「お見合いツアー」で第49回農林文学賞受賞  
 戯曲も多数ある

暮らしの中で共感する想いを

水木亮

今回エッセイ作品を読んで感じたのは、日本のシニアの文学愛好者や高齢者の趣味としての文章表現の場として、「文芸思潮」の存在はとても貴重だと思えることだ。  
 ここでは、庶民がその人生での感じた悲喜こもごもを、自分の言葉で表現し、たとえ文章としてはやや稚拙なところがあっても、言わんとするところを理解し、汲み取るフォロワーがある。そこがこの雑誌の大事なところである。シニア向きの文芸雑誌と言えればそれまでだが、では「文芸思潮」のような文芸雑誌が日本にどのくらいあるか。それを考えればその健闘ぶりがわかる。

今回も高齢者が元気になるような作品が多く見受けられた。また引きこもりや、精神を病んだ人にも少なからず元気を与えるような作品も見受けられて楽しかった。その意味でも「文芸思潮」の役割は大きい。

これからも、高齢者が元気になる、残りの人生を前向きに生きていけるような作品が多く寄せられることを期待している。「文芸思潮」はそれを応援している。

私の心に残った作品を優秀賞から紹介したい。

「珈琲店の奇跡」東菜代は優秀賞の一席になった。このエッセイは気分が落ち込んでいた日、ある珈琲店に入った。そこで前の客からのプレゼントのハプニングがあった。「どんなに絶望していても五分後には人生ががらりと変わることがある」ことを信じた。「希望の光が見えないとき

も、曲がり角の先には海が見えるかも知れない」みんな悩みながら生きている。そんな人々に元気をくれる、最優秀賞に匹敵する素敵なエッセイである。

「貯金これだけでよく平気だね」柴田節子は、清掃員をしながら遅く生きている姿が、正直に飾りなく描かれていて好ましいエッセイである。高齢化社会を生きるシニアの人々が共感する内容でよかった。

「チキンライス」晋多可幸はダンスホールで働く母子家庭の母親が、子供と死んだ話である。その母親が食べていた貧しい食事に寄せて、作者がどうしても書いておきたかった気持ちも伝わってくる秀作である。

「小さな発見 野菜の祖先と出会う旅」本間浩は、野菜の祖先を訪ねる記録で、野菜に関するいろいろな発見があり楽しい。その追求性が光っていた。

「べこ石の浜辺で」金田一淳は、少年の日に海に石を積み上げ、そこをポイントにして、さらに遠くまで潜れるようにした思い出を書いた。べこ石に寄せる思いが胸を打つ。

「私を待つ人」松田正弘は、障害のある子供の、友情を描いていて心が温かくなる。よい作品だ。

以下奨励賞の作品をみたい。

「浅間山噴火大和讃が繋ぐ鎌原の命」の村松佐保は、浅間山の噴火で犠牲になった人々を供養する「廻り念仏」について書いた。この歌の詠唱（歌詞が）がとても素晴らしい。

「隣村有志の情けにて 妻亡き人の妻となり 主亡き人の主となり 細き煙を営みて」——生き残った村人が、今一度力を合わせて生きて行こうと、此の歌詞で歌うのである。専門家が作った歌詞ではない。名もない農民が考えた歌詞だから素晴らしいのである。それを発掘した意味でこのエッセイは気持ちも伝わる。歌の力でもある。

上原翠子「大阿蘇の野焼き」は阿蘇の野焼きに寄せて、交通事故で死んだ夫と息子の思い出を書いた。これも切ない。「夢を紡ぐ手」の森千恵子は病気で聴覚障害になった作者が、落ち込むことなく手話ボランティアとして参加し、生きる力を得た経験を書いた。大切な実践である。手話ボランティア活動をしている男性の言葉、「手話は目で音を聞いてください。声は音のなかにあるのではなく、まなざしの中にもあるのですよ」この言葉は素晴らしいと思った。「僕の一八年間」の長谷川皓大は発達障害にありながら、人との出会いで元気に生きる姿を書いた。希望をもって頑張る姿が欲しい。

杉山高志の「立ち食いそばラブ」は立ち食いそばをめぐる話で、文章もうまく楽しい。

その他、松島さゆりの「心の橋」は、出会った中国人女性などとのユニークな着眼がおもしろく、さいとうゆきの「吊り上げ」、宮永徹子の「人生最後は特上握り」も印象に残った。

## 佳作

- 「海色ノート」 中村郁恵
- 「さよならのリフレイン」 秋葉みのり
- 「ビジョン・ブラッド」 西本美彦
- 「フクロウとの生活」 Maddy
- 「牛の涙」 羽田 良
- 「事務室より」 岡隆一郎
- 「かにばば」 林勢津子
- 「旅愁」 近藤幹夫
- 「山小屋温泉」 瀧沢 鈴

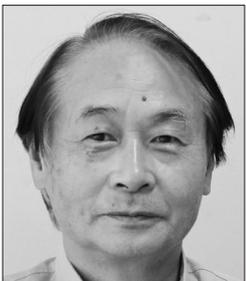
藤崎良子の「さよならモチの木」はモチの木に寄せる愛情にあふれていて共感する。

佳作ではゴルビー長田の「百万本の鉛筆」は一本の鉛筆に自分の想いを託すことで、平和のありがたさ、戦争の愚かさを書いた。この世代の発言は大事なことである。

「砂漠に生きる」の朝生その子は、モンゴルの砂漠に植林する体験を書いた。自分も朝鮮の木浦に生まれたことで外国に関心があるのだろう。なかなか貴重な体験である。登場する人物も魅力がある。

その他にも印象に残る作品があった。都桜ナオミの「私の幸せは、大量のオスひよこの死骸の上に成り立っている」は、佳作だが内容は悪くない。着眼がユニークだ。入賞うんぬんにこだわらず、これからも精進して欲しい。生きていて癒やされる、ほっとする。コロナもそうだが、

この厳しい状況にあって、書くことは人の気持ちを整理し、いかに生きてゆくかを考えさせる。共に悩みながら、かけがえない人生を書くことで、共感し合えることは人間だけの喜びである。文学不毛も言われる現代、人々にそんな味のある「文芸思潮」のエッセイコンクールであって欲しいと願う。



いがらし つとむ

- 1949 山梨県生まれ
- 79 「流瀆の島」で群像新人賞受賞
- 98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
- 2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞

## いい作品が目白押し

### 五十嵐勉

第十五回の「文芸思潮」エッセイ賞は昨年に引き続き全体の底がさらに上がっていることを感じた。三次予選を通過する作品が増え、どれもおもしろく、入選・佳作以上の層が驚くほど厚くなっている。いきおい、優秀賞・奨励賞の数も増えた。どれも落としにくく、結果的に大盤振る舞いのような結果になったが、作品の質は保証されている。また最優秀賞のトップワンが、これも昨年と同様の傾向

- 「山崩れの経験」 南家久光
- 「百万本の鉛筆」 ゴルビー長田
- 「詩集制作」 有澤かおり
- 「電話」 藤木雅子
- 「無」 斉藤はな絵
- 「単身赴任」 今ちゃん
- 「惜別」 牧 康子
- 「癌のバカヤロー」 倉沢辰子
- 「送る人」 九条之子
- 「0という数字」 徳重三恵
- 「消えたガスの匂い」 河上美智子
- 「ドイツで、髪を切ってもらったら」 湯谷大志
- 「瓶が教えてくれた夫婦のカタチ」 結咲りと
- 「新聞紙然れど新聞カゴ」 平岡佐一郎
- 「沙漠に生きる」 朝生その子
- 「属する世界がない私」 鎌田かをり
- 「靴を揃える」 呉 由美
- 「油と鎌と冒険の三日間」 竹澤一晃
- 「祖母の背中」 武藤蓑子
- 「大晦日のナモミはぎ」 鹿久保知里
- 「寡黙な寿司屋の大將」 大宮新子
- 「靈魂」 anehako
- 「ケロリン日記」 古城美夜
- 「ヘリにて救助されるも、後の分断」 佐藤悦弘
- 「年越しソバ」 われもこう
- 「3秒ルール」 安部としき

### 社会批評

- 「石の煙」 那須修一
- 「人生最後は特上握り」 宮永徹子
- 「カメさんと言われた生き方の先に」 さおり
- 「人生百年時代」 林 須磨
- 「夢を追う覚悟」 小倉一純
- 「土地が下す運命」 横井純子
- 「祖母の眉」 アマナエイコ
- 「診察枕の草子 スイカ編」 日暮真由美
- 「虫とりと、おじいさんと」 宮下さつき
- 「場の発達障害」 長井 潔
- 「私の幸せは、大量のオスひよこの死骸の上に成り立っている」 都桜ナオミ
- 「米国ケンタッキー州でのほのぼの出産」 谷美智彦
- 「多喜さんのこと」 坂口保典
- 「父」 鎌田 誠
- 「今 私のできる事」 金井つね子
- 「根みが愛に変わる」 ことり
- 「紋切型言葉というデイストピア」 宮崎啓吾
- 「われらの紀元二千六百年」 梶川洋一郎
- 「教育灰書」 午後山本一郎
- 「スマスマはバンドラの箱を開けた」 須磨貴美子
- 「安けりゃいい」 村岡雄一郎
- 「失われる日本らしさ」 久保 浩
- 「ブレイキテスト」 合原和晴
- 「今宵はひたすら人類の未来について思いを馳せる」 蝶野うらら

が見られ、四人の選考委員の推すものが異なり、一致点を見つけるのに難航した。二作を当選とすることで、なんとか治まったというのが実状である。

それでも、最優秀賞の輝きは、広く社会に読んでほしいまばゆい光を放っている。石田真一氏の「そば打ちにハマる高校生」は、学校で思いがけなく課題研究として始めてみた「そば打ち」が生徒たちに思いのほか受けて、飛躍的な広がりを実現していく話である。ここには、何でもきれいに提供されてシステムの流れに乗って動かされていく現代社会や教育体制に対して抗する声がある。青少年たちが自ら食べ物を作って味わっていくという、原初的な達成感と充実感がある。鉛筆さえナイフで削ることができず、物を作る実感から遠ざけられつつある青少年たちに、作って食べる基本的な実感を呼び起こすことができた実例が、ここには輝いている。この「手で作る喜び」は彼らのこれからの人生に、単純で重要な基軸を与え、大きな支えになっていくだろう。この作品にある爽快感は、根本的なものを見直し、ある重要な単純さを覚醒させるところに根ざしている。読み終わって、痛快感が残る作品である。

もう一つの最優秀作品「ピオラ」は、フランスに在住するピオラ奏者の人生の軌跡を映したものである。メーシリング順子氏の半生は起伏に富み、ピオラという楽器を通して、様々な人間模様が複奏して奏でられる。夢と挫折と希望

と思いがピオラの豊かな音色に溶け合って、独特の深みのある旋律となって流れているところに、人生の味が表出されている。Aというピオラを作る職人の人生と死もよく伴奏として生きていて、陰影を深くしている。生き方が意義深い存在として重みのある光を放ち、言い尽くせない妙味がある。

優秀賞もいい作品が目白押しだった。戴口莉那氏の「ビーバーの目」は会社勤めの中で鬱積し圧迫されて陥った鬱状態の危機から、カナダ旅行の広告の中にあつたビーバーの目に魅かれ、実際にカナダの自然を訪ね、森林の中で最後の瞬間にビーバーに遭遇し、視線を交わす話である。その眼差しの中に、生きる自然の本質を共感して快癒する結末には、魂を揺さぶられる感動があつた。現代に生きることのキーになるテーマがここには宿っている。

家森澄子氏の「息子の学生服」も、親友の突然の死の嘆きを、相手の学生服を着続けることよって、その深い絆を存続させ、友愛の姿を青春のエネルギーとして顕現した貫きは、大きく胸を抉ってくる。美しいものに触れさせてもらった。

松田正弘氏の「私を待つ人」は、発達障害児の心の支え合いによって、運動会の五〇メートル走をなんとか完走する話で、心の繋がりがいかに大きな力を生むか、人間の原動力の基点を想わせる感動がある。

## 入選

- 「亀」 田中浩司
- 「国境」 松原泰子
- 「スターライトパレード」 酒井恵三
- 「好きの記憶」 松本侑子
- 「けっばり先生と私」 山水文絵
- 「認知症の真実」 森 由美
- 「呻き」 七羽鳩子
- 「バラリンピックを国連障害者憲章の視点で考える」 徳安利之
- 「大学病院の外來」 鈴木幸子
- 「シチロベエさんの作戦」 植田郁子
- 「父の最後の思い」 竹園レイラ
- 「私の思う先に」 荒木景子
- 「思いがけない入院」 野宮健司
- 「心を見つめ直して」 土田菜呼
- 「感謝のワンカップ」 青柳みすず
- 「星形成論にのめりこんで」 前岡光明
- 「喜寿の免許皆伝」 小島恒夫
- 「鍵穴・サルボボ・タニト」 今井 満
- 「ああ、彰義隊」 水沢小三郎
- 「床上浸水」 松山はな
- 「看護師が全て」 紙屋里子

- 「戦没者遺児が考える太平洋戦争」 川口正浩
- 「振り袖物語」 三宅直子
- 「恋」 小糸ゆき
- 「人間五十年」 比戸 圭
- 「さよならゆうれい」 鷲田ヨウ
- 「ようこそ地球村『雑草園』に」 重松博昭
- 「私は大丈夫だから」 内久美子
- 「始まりの月曜日」 宮川星華
- 「仁吉の背中」 山田まさ子
- 「幻の約束」 今西 梓
- 「『障害者』を作るのは誰か」 深谷満彦
- 「トマト」 暁夏
- 「それはそれで良い」 吉田宏子
- 「息子への感謝状」 白楊風子
- 「ひとすじの光」 山崎ひとみ

高槻勇治氏の「じっちゃんとの追憶」は、被爆第三世代の体験引き継ぎを記した作品である。「じっちゃん」の直截な物言いが、原爆の凄さを伝えていて、語り継がねばならない被爆の実相を部分的にも宿している。おろそかにできないものがあり、現代が抱える潜在的な危機を呼び起こすためにも、注視すべきものを含んでいる。

晋多可幸氏の「チキンライス」は、ダンスホールを営む

「僕」の家で働き始めた女性が母子心中をする話だが、そのとき初対面で会った際、食べていたチキンライスが印象に残り自分もデザートでチキンライスを注文したことが、不思議な運命の糸を感じさせる作品に仕上がっている。重いものの残るエッセイである。

金田一淳氏は最優秀賞・優秀賞などキャリアの長い書き手で、いつもいい作品を寄せてくるが、今回も充実した筆力で子供時代の海岸の光景を、数十年後の再訪のシーンと重ねて、生動させている。手堅い、確かな筆致は氏の実力を発揮していて、失われた世界の輝きを命の意味の上に乗せて、固定し永遠化することに成功している。懐かしさがきらめいている作品だ。

社会批評賞優秀賞の藤野高明氏の「移動の自由と喜びを求めて」は、全盲男性のホーム転落事故を扱っていて、著者本人が三度、ホーム転落事故を経験している。九死に一生を經た体験からの告発だけに、痛切な説得力をもって迫ってくる。多くの人に読んでほしい貴重な内容である。

奨励賞も心に残る作品が多数あった。「さよならモチの木」(藤崎良子)は、一家の盛衰がモチの木とともにあり、父母の死や跡継ぎによる家の建替えによって枯れ伐られていく過程は命の姿として心を揺さぶってくる深い感慨がある。

「絵イコール人生」(宮尾美明)は以前の優秀賞作品の犬の話の続編で、その犬が死んだ心の深い痛手からどう立ち

「脳腫瘍闘病記」(出雲文子)の痛々しい闘病エッセイは、このような苛酷な運命に置かれた一人の人間の姿を赤裸々に呈示している。苦難への問いかけと叫びは痛切に届いてきた。熾烈な闘いから匂ってくる火花は根源の深い領域に達していた。

「墓参」は西嶋雅博氏にとっては、書き残さねばならない必然性のあるものだったろう。母と満州という運命を追って振り返るその旅路は、自身のルーツの原風景として永く残り、それは歴史に重ねられた痛みを伴って刻印されるものだろう。しっかりと胸に残った。

「山田耕筈とマニキュア」(藤田陽子)は山田耕筈の晩年の生活を美容師として生き生きと描いていて、たいへん興味深かった。珍しい経験は、それだけで価値がある。筆もしっかりとっていて、九〇歳の年齢を感じさせない捉え方も、快かった。

「成年後見制度は法の下の虐待である」(佐生綾子)は成年後見制度への鋭い批判で、現行の不備を鋭く突いている。改められる方向へ実際に進んでいくことを祈念する。

今回特筆すべきは、教育の領域に注目したい作品群があったことだ。奨励賞にも「破り捨てた招待状」(菱川町子)「恩師への思い」(佐高源)、「ジャイイ子」(田中美晴)の三作が入っているが、佳作にも「教育灰書」(午後山木一郎)があり、入選にも「けっぱり先生と私」(山

直るか、迫ってくるものがあつた。

続編として意義深いものに「大阿蘇の野焼き」(上原翠子)がある。交通事故で同時に失った夫と息子の幻影を負って、阿蘇の野焼きの炎の中に、その命の再生を願う気持ちが増え上がるシーンは胸を打つてくる。

「夢を紡ぐ手」(森千恵子)は老齢での耳の病の変化を手話という新たな世界の開拓によって乗り越える話で、通じ合うことの癒しを含めて心が暖められる作品である。

「あの子とその母、そして父」(中武寛)は、私個人としては優秀賞でもよかった深いエッセイで、病に喘ぐ愛児を背負って山道を急ぐ母親の姿は、命を繋ごうとする母性の気高い姿を読者の胸に永遠に残してくれる。私の胸に深く刻印された一作だった。しっかりと受け留めたい。

「浅間山噴火大和讃」が繋ぐ鎌原の命」(村松佐保)は、古い記録をよく掘り起こした素材への眼がいい。この和讃は価値が高く、噴火を現在に近く置く意志は重要なことである。和讃全体を本文中にどうやって見せるか、もう一つ工夫があればさらに迫ったエッセイになっただろう。

「裏方三十年の轍」(森崎律子)は、あまり陽の当たらない文楽の裏方の世界をよく掘り下げていて、密度の濃いレポートになっている。森崎氏はレポートの手腕は卓越していて、それぞれの世界への切り込みは一つの才能を感じさせる。今後もうこういう積極的なアプローチを期待したい。

水文絵)が入っている。これらは七〇年代の教育現場荒唐への振り返りも含んでいて、新しい視点で教師と生徒との関係を呈示してくるものだった。恩愛に象徴されるこれまでの深い姿に対し、荒唐によって反逆に曝され、傷つき迷う人間としての教師像は、問題の深さを示すと同時に、自身の教師像が浮かび上がってきた。

佳作にも「さよならのリフレイン」(秋葉みのり)「百万本の鉛筆」(ゴルビー長田)「旅愁」(近藤藤夫)「海色ノート」(中村郁恵)など秀でた作品があり、「ドイツで髪を切ってもらったら」(湯谷大志)「瓶が教えてくれた夫婦のカタチ」(結咲りと)「砂漠に生きる」(細川與美子)「事務室より」(高岡隆一郎)「ビジョン・ブラッド」(西本美彦)など載せたい作品もたくさんあった。「フクロウとの生活」(Maddy)などおもしろい素材だった。

「われらの紀元二千六百年」(梶川洋一郎)も鋭い社会批評として記憶に残っている。「送る人」(九条之子)はい題材だが、焦点の当て方をよくすればもっと光った作品になったことが惜しまれる。

「痛のバカヤロー」(倉沢辰子)「スマスマはパンドラの箱を開けた」(須磨貴美子)は異色作で大胆な表現が眼を引いた。「診察枕の草紙 スイカ編」(日暮真由美)「米国ケンタッキー州でのほのほの出産」(谷美智彦)「人生百年時代」(林須磨)「場の発達障害」(長井潔)もい

題材の輝きを有して記憶に残っている。

総じて今回も、それぞれの人生や運命の上に乗って、深い体験の世界を見せてもらった。それぞれの人が運命の苛酷さに堪え、苦闘を乗り越え、あるいは挫折して、輝きを得ている。一度きりの人生の輝きのうちのいくつかがここにある。それに意味を与え、それを共感し、共有していくことが、文学の大きな作用だろう。こういう形で深く広く共有できたことは、大きな喜びである。次回も期待したい。



みかみ ひろし

作家  
1945 山梨県甲府市生れ  
法政大学中退  
1982 「三日芝居」で  
すばる文学賞受賞  
著書 「三日芝居」  
「花供養」  
「月と五人の男」

## 言葉に誘われていく

### 三神 弘

メーシリング順子「ピオラ」は、「原因不明の右手の震えのせいで、バイオリンが弾きづらくなってきた」音楽家が、「ピオラ」に出会い、転向し、「もっと豊かな低音を

弾きたい」と、理想にかなう「ピオラ」を探し求めていく。そして出会った「ピオラ」は、友人達の推奨とはことなるものの、「何か暗い、反逆的なくせに温かい、豊かな音」を響かせたという。

読み進めていくうちに、「ピオラ」が人格をもち、制作者を語りもし、奏者である「私」の記憶をよみがえらせもし、人生さえ暗示していく。いわば、「ピオラ」が主人公になっていく。作品づくりには方法と技術が必要だが、こうした試みに注目したい。

石田真一「そば打ちにハマる高校生」は、農業科高等学校における教師と生徒達の「そば打ち」の実践記録だ。「そば道場に通い、技術修得に努めた」教師が、「そば打ち、やれへんか」と呼び掛けたところ、思いがけなく生徒達が集ってきたという。集ってきたものの、道具がないから、これも自作することになり、「木の丸棒を紙やすりで磨き上げて麵棒」にするといった具合だ。

それからというもの「毎春になると、そば打ちに興味をもつ生徒が入部を希望」するようになる。高齢者介護施設を訪問し「打ちたてのそばを試食してもらおう」活動を展開するようにもなる。「国際そばシンポジウム」に出席したり、「そば打ち段位に挑戦し、多くの生徒が合格」するようにもなった。

読みどころはたくさんあって、伝統文化の継承や、体験

学習の重要性、地域のボランティア活動にいたるまで、話題もさまざまに提供されている。社会批評にもなっている。闊達で、伸びやかで、痛快な作品だ。生徒達の息遣い、筋肉の動きが伝わってくる。指導者である教師の「生徒達がなぜそば打ちにハマったのか、私にはわからなかった」は、読者に手渡すものが多い述懐だ。

敷口莉那「ビーバーの目」は、「目を開けると、黒と紺を幾重にも重ねた空と、月と星があった」とはじまり、異国の夜であることがわかり「天井にぽっかり開いた天窓から夜空を見上げ」る「私」が登場する。

作品を読むことは、筋立てや意味でもなく、ただ、言葉に誘われていくことだといふことがわかる。作品は「私の日常生活を振り返り「太陽がのぼる前に目覚める夜が二年ほど続いていた」といい、その頃の日記が紹介されている。これも「私」の言葉であり、ここでは月と星もなくて「洞窟のなかに蝙蝠」が棲んでいる。

カナディアンロッキーへの旅の目的は「野生動物を見ることだった」とあり、「山中から」「動物の息遣いを感じ」たともいう。帰国が迫った日、もっとも出会いたかった「ビーバー」が「川面に浮かんだ」という。「私は走り出した。すると、相手もすいすいと水を切ってこちらに近づいてくる」「私と目があった」と、出会いを確かにする。帰国後の今日の「私」も報告される。「彼は滑るように

泳ぎ、私の元へやって来る。私をじっと見つめる」「その目を見ると、あの日と地続きのこの日常をもう少し生きてみよう」と、言葉を見つけていく。作品が、「野生」なるものに向けて言葉をさがす旅だったことがわかる。ビーバーの目について語るのは、こんどは読者の側になる。

菱川町子「破り捨てた招待状」は、教室が無法地帯となる「学校崩壊」のなかで、定年間近の女教師の奮闘振りが語られていく。孤立無援であり、これまでの経験が役に立たず、自信をなくしていく。「学級崩壊」というマスコミ用語が、具体的に描かれてもいく。読者には、女教師の相手というのには目の前の生徒ばかりでなく、教育制度や、父兄や、姿の見えない時代や社会にもあるのではないかと疑われてくる。

さて、歳月を経て「学校崩壊」のなかで手こずらせた卒業生から、成人式への招待状がくる。女教師の態度は「即座に破り捨てた」とある。この作品の評価すべきは、いわゆる恩師と卒業生の「美談」にしていけないことだ。そこにこの女教師の教育者としての誇り、信念を垣間見ることができる。

蝶野うらら「今宵はひたすら人類の未来について思いを馳せる」は、「哺乳類の体細胞クローン、ドリー誕生を報じるテレビのニュースに釘付けになった」とはじまり、「創世記の天地創造をビミョーに信じて」いる「私」は「神

への冒険じゃないの」と衝撃を受ける。作品のテーマは「人間の欲望は何処まで行くのか」と明らかで、論理的文章に直すことで簡単に要約することはできるが、この作品の読みどころは「私」に親しみと身近さがあり、語り口に魅力があることだ。大真面目な自問自答のあげくに、「わけがわからないままに」「今夜は一杯飲んで帰ろう」の気分にも、ユーモアがある。題名も気が利いていて、作者の余裕をうかがわせる。

佐高源「恩師への思い」は、古希を過ぎたある日、身の回りを整理していると眼鏡が出てくる。小学生のとき先生に買ったもらったもので、このことから、眼鏡をかけて鏡をのぞいたときのうれしかった顔などがよみがえってきて、眼鏡は、恩師への愛情を身近にする記念品となっていく。作品は、恩師から贈られた眼鏡をかけての「成長の記録」ともなっている。

宮永徹子「人生最後は特上握り」は、二十代の女性の一人旅だ。行き当たりばったりのスタイルであることから、読者は「私」の気ままさに同行し、「私」の語るままに、一緒に体験をするということになる。食費を節約する旅行であることから「最終泊の夕食は贅沢三昧をしよう」と決めている。やがて旅の終わりに寿司屋で念願の「特上握り」に至福のときを過ごすのだが、ここからもうひとつのドラマがはじまっていく。

のドラマが薄いようにも感じた。優秀賞でもいいのではないか？ と個人的には思えたのだけれど、独特な落ち着いた雰囲気もあり、総合力で一位を射止める結果となった。同じく、最優秀賞の「そば打ち」は語り手である高校教師が「そば打ち初段」を得て、高校生にそば打ちを教えるという冒頭から、サクセスストーリーの如く、物語がどんどんスケールアップして行くくんだりを読ませる。とはいえ、社会批評賞になるだろうと踏んでもいた。最優秀賞となったときには「いいんすか？ そば打ちっすよ？」とサブライズ人事を思わされ、狐につままれたような心持ちとなった。

優秀賞の「珈琲店の奇跡」は最後の辺りで含蓄のある話に持って行った手腕は評価したい。とはいえ、今年のエッセイ賞を代表する作品と呼ぶには、小事件過ぎる。確かにこういった人生の喜びは稀にあり、執筆動機もわかる。けれども、皆が大なり小なり経験することで、「奇跡」はやはりいい過ぎだろう。「ニューヨーク東8番街の奇跡」とか「三十四丁目の奇蹟」とかジャッキー・チェンの「ミラクル／奇蹟」とか、タイトルに「奇跡」と付くとどうしても作品のハードルが上がってしまう。エッセイや小説の題名に付けることは個人的には推奨しない。

ところで毎年、推薦作が上位に食い込まないことには定評のある私だ。都築に審査段階で推薦されたら最早、



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ  
東海大学文学部卒  
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞  
「狼を見る」(文芸思潮)  
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

## コロナ禍のリモートではない短縮選考会 都築隆広

コロナ禍。NOMN会議やリモート飲み会にも、ようやく慣れた七月下旬の選考会は「リモートにはならんだろうなあ」と予想はしていたが案の定、マスクを付けて机を離し、除菌したりとソーシャルディスタンスを意識し、二時間というタイムリミット付きで行われた。最優秀賞は全体的に評価が高かった「ビオラ」と五十嵐編集長と私が推していた「そば打ちにハマる高校生」となり、水木亮審査員が強く推薦した「珈琲店の奇跡」は惜しくも最優秀賞とはならなかったものの、優秀賞の筆頭におさまった。

高評価の「ビオラ」だが、最優秀賞になったのは意外でもあった。ビオラという楽器への作者の想いは描かれているものの、主題であるはずのビオラ職人のAさんとの交流不吉といっても過言ではあるまい。今回の推しは優秀賞「チキンライス」と奨励賞の「山田耕筈とマニキュア」だった。「チキンライス」は、自宅がダンスホールだという設定がすでに素敵なので、題名が「ダンスホール」でも良かった気がする。しかし五十嵐編集長に「これは『チキンライス』じゃないと駄目ですよ」と断言されて、「で、ですよねえ」と今年もつい忖度をしてしまった。「チキンライス」というと、我々の世代では松本人志が作詞して、浜田雅功と横原敬之が歌ったヒット曲を連想する。こちらも貧乏な少年時代を歌ったもので、チキンライスが子供達にとって、外食の御馳走と貧乏料理の間だった時代が確かにあり、昭和史の一頁だろう。現代だと喫茶店でチキンライスを食べるとケチャップにこだわっていたりして、逆に高くつく。チキンライスに憧れと親近感があった時代は遙か昔で、最後の三行にはほろりとさせられた。

「山田耕筈とマニキュア」は巨匠山田耕筈にマニキュアを塗ったことがあるという、貴重な体験記だ。しかし「有名人に頼って書かれたエッセイは良くない」という物言いがついて、あまり支持が得られなかった。音楽家は楽器を演奏するからマニキュアを塗る必要があったのか、単なる性癖か、山田耕筈がなぜ、マニキュアを塗っていたのかに関する説明があったらもっと良かったろう。これも活字にすべき貴重な経験である。

# 第16回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでも構いません。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

## 文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

**主旨**●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

**募集内容**●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）。

**応募資格**●不問

**応募規定**●4000字以内（極力パソコン A4用紙出力のこと。やむをえない手書きの場合はA4原稿用紙を使用する／B4は失格）。※応募審査料1800円を郵便為替で同封のこと。パソコン原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。別紙に①応募部門（第16回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④性別・年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。⑨応募審査料1800円を郵便為替などで同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは15USドルを同封。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

※恐縮ですが応募審査料1800円を御協力  
くださいますようお願い申し上げます。

**賞**●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

**選考委員**●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

**締切**●2021年3月31日（当日消印有効）

**発表**●予選通過作品発表は2021年6月25日発売の「文芸思潮」80号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作・優秀作は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

**主催**●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。

またまた水木選考員が執拗に推していたのは、優秀賞「貯金これだけでよく平気だね」。金持ちの胸糞な態度の悪さと、語り手の清掃員の素朴な人柄が対比となって、読者好感度もきつと高い作品だろう。ただ、金貯りの老後に二千万円必要問題に関して、それだけの金銭を必要としている人々が「そもそも欲張り過ぎている」と結論付ける部分には異論がある。芸人の中田敦彦が開設したYouTubeチャンネル「YouTube大学」によると、その報告には「国民の金融リテラシーを高めさせ、投資を行わせ、個人で老後に備えさせる」という、裏の意図があるらしい。つまり「老後に二千万円が必要っていうのは、単に投資を開始せよって話ですぜ？」とYouTubeで聞き齧った知識で口を挟みたくなる。まず、NISA（少額投資非課税制度）より始めよ。……と一応の打開策を提言はしてみても、現実問題、このエッセイに共感する人の方が、急にNISAを始める人よりは多いことだろう。他にも、優秀賞「小さな発見 野菜の祖先と出会う旅」「息子の学生服」、社会批評優秀賞「移動の自由と喜びを求めて」あたりも力作だったので推薦しておきたい。

コロナ禍の時代、投稿されるエッセイも現代を意識させる題材が多かった。とはいえ、蓋を開けてみると、上位を占めたのはノスタルジーや人間愛を描いた作品群である。裏を返せば、過去への哀惜や人間愛を通して閉塞的な自爾

社会を乗り切ろうという人々の想いが、エッセイという形で結実したのかも知れない。こんな時代だからこそ、過去を愛し、人を愛し、そば打ちもしてみたい。



選考会風景